

原発ジプシー 被曝下請け労働者の記録

堀江邦夫 著

本書は昭和54(1979)年9月に刊行された「原発ジプシー(被曝下請け労働者の記録)」の増補改訂版として、平成23(2011)年5月に、実に32年ぶりに再発行されたものである。今回発生した東日本大震災に伴う、福島原子力発電所事故復旧に当たる作業員の実態を窺い知る事のできる本と言えよう。

著者の堀江邦夫氏は、東京都立田無工業高等学校建設(土木)科の一期生である。卒業と同時に大手建設会社に就職し、当時は未だ黎明期だったコンピュータによる管理・積算などの開発に携わり、将来を嘱望される技術者であった。

氏が何故に天職とも言うべき職場を捨ててまで原発に拘ったのか、氏の文を引用すれば「原発で働いてみよう、そう思った動機は、じつに単純なものだった。『いらだち』。原発の素顔が霞んで見えることへのいらだちを、実際にその現場で働きながら自分自身の目と耳で確かめることで解消したいと考えたからだ」と言うことである。原発の実態が霞んでいるのは、原発に関する情報が溢れかえる現在でも同じである。

氏は決意した後、ほぼ1年にわたり原子力発電所の下請け作業員として美浜発電所、福島第一原子力発電所、敦賀発電所などを渡り歩く。ピンハネで搾取されつつも、原発の施設や設備の中をイモ虫のように這い回り、死の影におびえながら綴ったレポートである。トイレでメモを取り下着の中に隠し、防護服からの着替えの時はメモ用紙を口に含みながらの隠密行動であった。

氏の初版本の刊行に当たっては、関係する下請け企業や登場人物は全て仮名としてあったが、

刊行後に電力会社は名前の割り出しに血眼になったという。しかし、表面上は無視する態度を貫いていた。また、評論家などは氏に対する敵意まで示していた。この事に氏は「労働者たちの声を編んだ本を『バカらしい』との一言で一蹴してしまう発電所の元所長、労働者は被爆するのが当然といった発言をしてはばからない電力会社の幹部、労働者の意識などを収録した報告書を『社会的影響が大』として闇に葬ってしまう電力会社の団体、そして原発による『被爆者』が十数万名にも達した事実を指して『ご同慶の至り』と平然と語る研究所の所長…」と憤りをあらわにしている。

渡り歩いた原発の知られざる実態は本書を読んで頂くこととして、氏と私の関係について少し述べさせて頂きたい。氏が田無工高の生徒だった頃、私は当該工高建設科の教員であった。成績はトップクラスで落ち着いた風貌の生徒であり、この様な過酷な場所へ潜入してレポートするのが信じられなかった。姿形には見せない強い意志を、心の中に持っていたのであろう。

氏は本文中でも原発設置に反対するとの表現は一切使っておらず、労働者の保護と施設の改善を唱えただけである。しかし、関係者(誰かは分からない)は、氏を原発反対の危険人物としてマークしていたらしく、行く先々で尾行が着いたとのことである。取材でホテルに宿泊し、外出で部屋を留守にする間に何者かが侵入し、取材資料を見られるなどの狼藉がたびたびあったらしい。スパイ小説さながらに、髪の毛をドアに貼り付け侵入者の有無を確かめたこともあると笑っていた。

国や電力会社が、尾行などに注ぐエネルギーを施設・設備の改善、そして汚染防止等の改良に向けておれば、今回の被害も小さく出来たのではないかと悔やまれてならない。

(現代書館、350頁、2000円)(毛利 昭)